

北京秋天

岡崎 彬

台基廠一番地・・・・・・對外友好協會の門を出て左折するとすぐに長安街、それを渡ると北京飯店、当時の長安街には中央のフェンスがなかった。

荷車が驢馬に引かれてゆっくりと動いていたし、その反面すざましいばかりの自転車の流れ、そして満員鈴なりのバスの屋根の上には屋根一杯の大きな黒い袋がゆらゆらと揺れていた。ガソリンの代わりに天然ガスが入っているとの事。

1963年10月、当時香港に住んでいた私は、覚書貿易訪中団の末席に加えてもらい、戦後初めての訪中をする事になる。前夜、人民大会堂で周恩来総理主催の覚書貿易訪中団の歓迎宴が開かれた。宴たけなほにして、周総理の講演が始まった。やや高めの、良く通るお声で、淡々と話しを始められた。

『中日国交の歴史は、史書に書かれているものだけでも二千有余年があり、史書に書かれていない時代に遡れば、おそらく四千年、或は五千年にも達するものと考えられます。そしてこの両国の国交は総じて大変良好でありました。

しかしながら、近年の日中関係は、日清戦争を端緒として戦争状態が継続し、決して良好とはいえないのです、しかし、その期間は僅かに75年間であり、五千年の歴史の中ではほんの瞬間に過ぎません。この隣国同志の長期にわたる友好関係は、世界の隣国国交史の中では極めてユニークなものと言えます。

総じて何処の国でも隣国同志は、仲の悪い事が普通であります。欧州、中東、アジア、アフリカ等いずれの地方でも、隣国同志の国交は、争いと侵略の繰り返しであります。その主たる理由は、民族の違い、言語の違い、宗教の違い、文化の違い、資源の偏在と君主の征服欲等様々であります。

しかし中国と日本が争ったという記録は近年の75年のみなのです。という事は我々中国人と日本人は本来仲の良い隣国関係で結ばれていると云う事です。

一方世界におけるアジアの地位は、まだ低いという残念な事実があります。欧米の列強諸国に比べ、アジア諸国は欧米の植民主義から解放されたばかりで、国力でも、庶民の生活レベルでも、格段と低いのが現実です。しかしその中で、日本一国のみがアジアの国として気を吐いています。私達はまだまだ日本より遥かに遅れた国ではありますが、一生懸命に頑張っています。そしていつか日本に追いつき、肩を並べてアジアの発展の為に努力しましょう。アジアにおける平和の確立は、人類究極の目的である世界の恒久的平和に大きく資する事になります。私たちの老朋友国日本・・・・待っていて下さい！』

鳥肌が立つような興奮が体の中を走った。我々アジア人のこれから進むべき道が明確に示された。

戦後18年、オリンピックを招致してやっと列国に仲間入りをした日本だったが、未だ戦争の傷跡をどこかに引きずっているような状態だった。

しかしその日本のレベルから見ても中国の現状はひどいものだったが、その現実に豪もこだわることなく、堂々とアジアの未来を説き、世界平和を目指している総理の姿は、さすが十億人（当時、中国の人口は十億人といわれていた。）の中から選ばれた人の偉大さそのものであり、その大きな黒く、優しい眼は、北京秋天の紺碧の空を通して遙か未来の世界へ注がれていた。

『人民広場にはもう行かれましたか？』 流暢な日本語でSさんが尋ねる。

Sさんは北京外交学会の人、戦争中東京帝大に留学していたが、空襲が烈しくなり、上海におられる両親から『一刻も早く帰国せよ』との矢のような催促。

大学も殆んど授業がなくなり、勤労働員で工場通いの毎日となっていたので、終戦の2か月前の6月に帰国されたとの事であった。

『いいえ、まだ行っていません』と答えた時には、二人の足は天安門に向かって歩き出していた。

当時毛沢東主席は未だ御存命で、毛沢東記念館は建てられていなかった。したがって天安門を背にして南を向けば、西側の人民大会堂、東側の歴史博物館と革命博物館に囲まれた恐ろしく広い人民広場が有り、その南端に前門が見えた。

北京秋天・・・・・・息を飲むほどの美しい紺青の空は、東西南北全ての方向に限りなく広がっている。

戦前小学校年の時、父親に連れられて北京を訪れた時、宿泊していた北京飯店の窓から見た光景は、遙かに狭い道一杯に夥しい数の洋車（黄包車）の群れと、真ん中を走っている路面電車で膨大な人の動きであったが、今はその道が何十倍も広げられ、道から広場に発展していた。昔あった人の群れは自転車の流れに変わり、広場の両側を激流のように走っていた。対照的に広場の人の数は三々五々で、凧を揚げている人もいた。

そこには、まばらな人達の静と自転車の奔流という動が共存している不思議な環境があった。

『東京の空は今でも綺麗ですか？』Sさんが突然たずねる。『え??』と咄嗟の答えに窮する。

急速な工業化と自動車の普及で大気汚染が問題視され始めていた日本・・・・・・返事に窮している私に構わず、Sさんは続けた。

『きれいでしたねえ……。東京の空は……。帰国の日、朝は早起きして湯島の聖堂へ行きました。見渡す限りの焼け野原でしたが、西の方に富士山が輝いていました。美しい紺碧の空には飛行機雲が数条走っているだけでした。

《国破れて山河あり》 杜甫の詩を思い出しました。

『知っていますね。』 私の答えを待たず、Sさんは続けた。

『日本が中国を侵略しているので、中国人は皆日本が嫌いでした。中国人が集まると、何処で空襲が有り、何人死んだとか、何軒焼けたとか嬉しそうに話しをするのが常でした。又日本の兵隊が中国のどこかで何か非道な事をしたという話を憤慨して語る事もありました。私も中国人ですからそんな話を聞くと腹の立つ事も数多く有りました。しかしそんな時は必ずと云ってもいい程私が住んでいる下宿の事を思い出してしまうのです。』

『お爺ちゃんはお好きな碁の相手として、私を本当の孫の様に可愛がってくれました。私は外国人なので勤労働員からは除外され、家にいる事が多かったのです。

お婆ちゃんも家庭菜園作りの助手として、またまた大変大事にしてくれました。収穫した野菜はいつも一番に私の為に料理してくれました。ご主人は出征して南方戦線に行っているとの事。おかみさんは家の事も大変でしたが、防空警護団や町内会の仕事がいそがしく、「すまないね」といいながら色々な仕事を私に言い付けました。

お嬢さんが二人いましたが、郊外の軍需工場の寮に泊まっていて時々帰ってきました。東京は毎晩のように空襲がありましたが、私の住んでいる本郷の一角は幸いにも焼け残っていました。社会全体はほぼ混乱状態と言っても良い程でしたが、私の町はまるで戦争とは縁のないような静けさを保ち、整然としていました。空襲警報のサイレンと爆撃の爆音を除けば、《何処で戦争が起こっているのか?》と錯覚するほどの別世界でした。

毎朝の家の前の掃除、皆だいたい同じ時間に掃除をはじめます。「お早う！」とにっこり笑って交わす朝の挨拶。打ち水、朝顔の花に光る小さな水玉、夕涼み、縁台、うちわ、蚊取り線香、線香花火。如何に空襲が激しくてもこう云った昔からの伝統は失われていませんでした。

私にとって一番大切に忘れられないのは、小さな挨拶の言葉です。

「行って来ます！」、「行ってらっしゃあい！」、「ただいまあ！」、「お帰りなさい！」

と言う子供達の声はみんな疎開してしまったので聞こえなくなりましたが、それでも大人達は静かな声で同じ挨拶を繰り返していました。この会話は家人の間だけで交わされるのではなく、その町に住んでいる人々共通の挨拶でした。

日本語学校では勿論これらの言葉を教えます。ごく普通の挨拶の言葉としてです。私もそう思っていました。しかし、これらの言葉の持つ特別な意味に気がつくのに2年かかりました。

それは信じあっている人たち同志の挨拶なのです。

それは親兄弟は勿論、隣のおばさんでも良い、酒屋のお兄ちゃんでも良い、薬屋のお姉ちゃんでも良い、同じ仲間と自然に認識してしまった仲間同士の挨拶なのです。

仲間でない人にも同じ挨拶をするでしょう。しかし抑揚が違います。

こんな言葉は中国語にはありません。「行ってきまあす」を翻訳すれば「我去了」となりますが、日本語のように人間的な温かい内容を含んではいません。英語にも、ロシア語にも、他のいかなる言語にもないでしょう。私はこれに気付いて初めてその町の住人になりました。

中国人留学生“S”でなく… 狭間さんちのお兄ちゃんとして……

『こんなに平和で善良な人たちがどうして戦争をするのだろうか？』 私にとっては理解できない疑問でした。』

広場の真ん中のベンチに座っていると、時々子供がやってくる。外国人が珍しいのか少し離れてまじまじと見つめる。背広をきているから外国人とわかるのだろう。当時、中国人は皆工人服か中山服だったから。

『夕べの周総理のお話は素晴らしかった。私の長い間願っていた事……日本と仲良くなって欲しい。……それが一気にかなえられた気持ちです。いつか国交も正常化するでしょう。そしたら私もあの美しい町に帰る事があるかもしれません。』

Sさんは《行く》と云わず《帰る》といました。

遠くを眺めて淡々と語るSさん。北京秋天……息を飲むほどの美しい紺青の空は、東西南北全ての方向に限りなく広がっていた。そしてベンチに座っている二人の影が少し長くなってきた。

Sさんにはきっと日本に恋人がいたんだろうと思った。……だが、訊かなかった。

【北京秋天】 それは人の心を透明にしてくれる。